

ジエラルド      グローマー  
 氏名（本籍）      Gerald Groemer（米国）  
 学位の種類      博士（音楽学）  
 学位記番号      博音第16号  
 学位授与年月日      平成5年3月25日  
 学位論文等題目      <論文>「やんれ口説節」の研究

- 幕末・明治における大衆歌謡の創作と伝藩 -

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	柘植元一
（副査）	“	“	（ “ ）	松山隆
（ “ ）	“	“	（ “ ）	上参郷祐康
（ “ ）	“	“	（ “ ）	大岡信
（ “ ）	東京国立文化財研究所	音楽舞踊研究室長		蒲生郷昭

（論文等内容の要旨）

政治的な混乱期であった幕末・明治初期の時代において、一般民衆は、世情の混乱に乘じ多種多様な新しい歌謡のジャンルを生み出した。その多くは、叙事的な歌詞を基本とする、例えばアホダラ経、ちょんがれ、ちょぼくれ、でろれん祭文等のような歌であった。中でも嘉永頃から、多大の人気を博したものに、いわゆる「やんれくどき節」（別名：「心中くどき」「やんれぶし」など）があった。こうした「くどき節」は、決して文学的・音楽的な価値の高さによって世を風靡したのではない。従って、現在でもそれは学術的研究の対象としては取るに足りないものであるという意見もしばしば聞かれる。ところが、「ちょんがれ」「アホダラ経」などというジャンルが大道芸人の消滅と共に絶滅したのとは異なり、「くどき節」はいまでも地方で行われる盆踊り唄として生命を保ち続けている。つまり、様々な叙事的な大衆歌謡ジャンルのなかで、とりわけ「やんれ口説節」は地方・都会の別なく民衆に受容されてきたのである。従って「やんれ口説節」は、文化の生産・普及・受容に関する最適な研究資料を提供してくれる。

「やんれ口説節」の研究に際しては、「やんれ口説節」の二元性、つまりその都会出版文化と地方口頭伝承との二つの面を常に考慮しなければならない。「やんれ口説節」の歌い手（或いは売り手をも兼ねた人）が単に唄を普及させただけでなく、聴き手もまたその唄を覚え、新しい旋律を付け、詞章に変化を加え、様々な「創造的受容」を行った。言い替えれば、「やんれ口説節」は、一方的な伝承過程を通して広められたものではなく、むしろ演奏することによって絶え間なく創り変えられた唄であった。従って、「くどき節」に関する諸問題を解明するためには、都会の文化と地方の文化との関係に焦点を合わせ、そこにおける普及・伝播・受容などといった

現象の具体的な分析が必要である。

本論は序説においてまず、これまでの日本民謡研究の主流について述べ、そのいくつかの弱点を指摘し、そして「やんれ口説節」の研究に必要な方法について論じる。

第一章は、「やんれ口説節」が歌謡史に登場する以前に、主に関西で流行した様々な「口説節」をテーマとする。「くどき」が「ことほぎ」から由来するという堀一郎の説もあるが、無理に古代まで遡らなくても、「やんれ口説節」が他の「口説節」のみならず、浄瑠璃、歌祭文、民謡、などからも少なからぬ影響を受けたことには、疑いをいれる余地はない。口説節の多くは、門付け芸人・読売が歌い歩いたというより、盆踊り等の踊り歌であつたらしい。本論では、こうした主に関西で行われた「口説節」についてまず述べておき、次にその「やんれ口説節」との関係について考察した。

第二章では、口説節一般の諸ジャンルやその分類方法について論じ、続いて「やんれ口説節」が「新保広大寺」から明治の心中口説まで発展してゆく過程を詳しく検討する。

第三章においては、「やんれ口説節」の著名な作詩家の何人かに焦点を当てる。彼らについては、かなり具体的な情報が残されており、特に仮名垣魯文が「やんれ口説節」を作った経緯に関しては、『かな反古』に記録されているので、ある程度まで江戸における「やんれ口説節」の作製の事情を窺い知ることができる。また地方においてもかなりの数の「口説節」が作られたので、地方作者の活動についても言及する。

第四章においては、江戸（東京）や地方における「やんれ口説節」出版活動の詳細に述べる。江戸では特に吉田屋小吉が瓦版の大手であり、また彼が店を開いていた馬喰町が「やんれ口説節」の普及に当たっては一つの中心地であつたと思われる。

第五・第六章では「やんれ口説節」の普及の実態がより詳しく述べられる。「読売」や「警女」という演奏者の唄を掲載し、分析することに加えて、彼らを取り囲んでいた環境、あるいは彼らと聴衆との間の関係についても論じる。

第七・第八章は、主に「やんれ口説節」の受容をテーマとしている。第七章では、「替え歌」としての「やんれ口説節」のいくつかの具体例が挙げられ、それが演奏された集团的娯楽としての盆踊りにおける音頭取りや踊り子との間の関係に関する考察も述べられる。第八章は個人としての津軽のボサマ達がどのように「やんれ口説節」を受容し発展させたのかを主たる問題としている。

以上の諸章に共通する主題は、都会の下層市民や地方の貧民・被差別民などがどのように「やんれ口説節」の発展に貢献したかということである。多くの場合、こうした封建社会の公式的な秩序から除外された人々は、差別を受けていたからこそ、こうした文化の担い手になりえたことは明らかである。明治維新に伴い資本主義市場が漸次的に成長し地方へと浸透し、またこうした窮民などの身分が平民となり、公式的な差別がなくなった。とはいえ、彼らの経済的地位は一向して改善をみななかったばかりか、彼らの携わっていた職掌も衰退してしまった。結局、「やんれ口説節」を歌っていた芸人は近代化の犠牲者となり、「やんれ口説節」は、盆踊り唄として一つの「古典芸能」となってしまった。

最後に、「やんれ口説節」の流行の背後になにがあつたかについて、若干言及した。文学と客

観的なルポルタージとの中間的な存在であった「やんれ口説節」は、当時の人々の興味をそそり、より純粹に文学的であった古いタイプの詞章に比して、著しい光彩を放ったことであろう。特に心中というテーマは、当時の社会的・政治的の混乱の中にあっては、個人的行為の究極現れとしてその意味が強調され、多い人々に受けたとされる。

### "Yanre Kudoki bushi"

This study traces the history of the development of a genre of popular narrative known as "Yanre kudoki bushi" (also "Yanre bushi" or "Shinju kudoki"). "Yanre bushi" were highly popular from the last days of the Edo period to the mid-Meiji era. Themes treated in song texts varied greatly, but tales of double love-suicides (shinju) were the most common topic.

Chapters one and two cover the early history of "kudoki" in general and "Yanre kudoki bushi" in particular. Early "kudoki bushi" were mainly popular in the Kansai area, but these songs did not directly influence "Yanre Kudoki bushi," which were popular mainly in Edo. "Yanre Kudoki bushi" seem to have developed around the 1840s. The melodies of these songs are related to a Niigata Prefecture folk song known as "Shinpo kodaiji."

Chapter three treats the few known authors of "Yanre Kudoki bushi." Kanagaki Robun's early career is explained in some detail. Chapter four gives much information on the publication "Yanre Kudoki bushi" chapbooks. Chapter five examines the vendors of these booklets.

The succeeding three chapters concern the diffusion and reception of "Yanre Kudoki bushi." Chapter six gives information on the Niigata goze; chapter seven deals with the use of "Yanre Kudoki bushi" as bon dance songs. Finally chapter eight demonstrates how "Yanre Kudoki bushi" became the basis of what is today known as "Tsugaru-jamisen."

Chapter nine contains a discussion of the meaning and popularity of "Yanre bushi." These songs functioned as a vehicle for news. Their popularity relied heavily on the manner in which "shinju" stories allowed individuals to fantasize a world in which individual moral decisions could give definite meaning to life during a time of great social upheaval and uncertainty.

A list of titles and locations of extant "Yanre bushi" texts and the names and addresses (when known) of "Yanre kudoki bushi" publishers is given in two tables at the end. An appendix presents transcriptions of several hitherto unpublished "Yanre kudoki bushi" texts.